新 農業経営者ルポ／第8回

顧客に必要とされ環境も守る道探す



草野農場 草野武

滋賀県東浅井郡浅井町北ノ郷167
電話 0749（74）1965

■滋賀県浅井町の草野武は、有機・無農薬の稲作を目指している。また黒米などの有色素米の栽培にも積極的に取り組み、特色のある稲作経営で地域の評価を得ている。
■かつては肉牛120頭を経営していたが挫折。その後いったんは農業以外の事業に力を入れるが、稲作農家として再び専業農家となったという異色の経歴の持ち主だ。
■それらの経験から高収益と環境負荷低減の両立を自身の使命と考える。（斎藤訓之）

今までは誰がうちのコメを欲しがってくれるのかわからなかった。2004年はそれがわかってきて、活路を見出せた。

「コメは先行き明るくないと思って落ち込んでいた時期があった。でも、今こうしてコメを続けていられるというのは、僕が必要とされることがまだあるんやろなと思うんです」

草野農場がある滋賀県浅井町は、琵琶湖の北東に位置する。湖北と呼ばれるこの一帯は、水が豊富な上、温暖。しかも病害虫が比較的少なく、稲作に向く地域として有名だ。半面、12月～3月まで積雪があるため、年ごとの収入がコメの一作にかかっているという厳しさもはらむ。

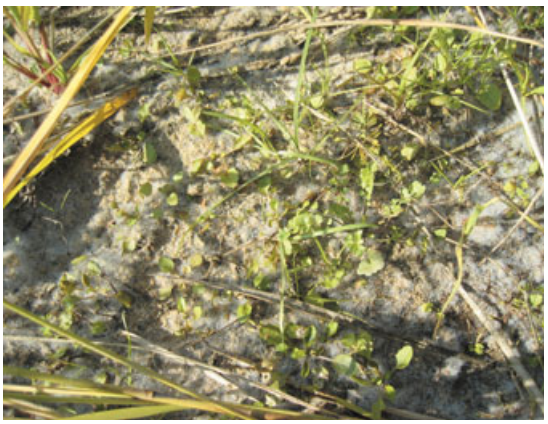


▲左から、黒米（アサムラサキ）、赤米、緑米（アクネモチ）。



▶有色素米は、コシヒカリを直売している顧客に話題作りとして送ってきた。表面には品種の解説と利用法を記している。





▲ミキシング・キャスタでコメヌカを撒いた後の圃場表面は白い菌糸が覆う。この後冬季湛水する計画だ。

有機・無農薬を志向した農法と有色素米で特徴ある稲作を展開

草野の稲作は、コメヌカ、モミガラ、給食の残さから作ったコンポスト、鶏糞といった有機資材のみを肥料に使う。除草は初期除草に除草剤を使い、後は機械除草のみという、有機・無農薬を志向したものだ。

２００４年の作付けは、コシヒカリ５ha、黒米のアサムラサキ１・８ha、緑米のアクネモチ40ａ、低タンパク品種として開発されたＬＧＣソフト１・８haという内訳。

コシヒカリは関西圏を中心とした消費者への直売と物納の借地料用。有色素米は地元に本社のある健康食品チェーンに直販。ＬＧＣソフトは大阪の米穀店に販売した。

有色素米の販売先は、もともと土産物店と観光レストランを経営していた会社だったが、最近業態転換した。中国産野菜の残留農薬が話題になった頃、観光客が土産物の原産地をチェックして選ぶようになり、実際輸入ものも多かったため売上げに響いた。

それをきっかけとして、地元産のもので、しかも安全で健康によい食品を売る健康食品チェーンとして再スタートを切った。「その際、地域の農家に農産物を売って欲しいという呼びかけをしてきたんです。そこで、黒米のサンプルを持って行ったところ、作ってくれと頼まれた」。黒豆、黒ゴマなどとともに「黒五」として健康に良いイメージが高まっていた黒米と、草野の農法が評価された。

草野の有色素米は、それまで直売の顧客に対する話題作りの一つとして少量を生産しているだけだったが、草野は早速依頼に応じ、翌２００３年はアサムラサキを５haと大々的に作付けた。





▲「来年もぜひ実習を」と横山教諭（右）。写真の圃場の内、いちばん奥の部分が実習に使っている圃場。

◀実習用圃場に掲げた看板。NGOによる国際協力田、滋賀県による「環境こだわり農産物栽培ほ場」、小学校からの宣言の3つが表示されている。

新農業経営者ルポ／第8回

顧客に必要とされ環境も守る道探す



▲自宅近くの草野農場の圃場。十数cm程度の作土の下には礫層があり、耕しづらく水が抜けやすい。何回かの試験後、不耕起栽培には不適と判断した。



▶自作の鉄骨の倉庫。乾燥調製設備、収穫物などを収める。有色素米の乾燥調製を始める前には、乾燥機をはじめとする機器類はすべて掃除する必要がある。



▶トラックのボディにエアコン3基を付けて作った低温貯蔵庫。エアコン1基でも15℃程度での貯蔵が可能という。

ただし、２００３年は全品種とも収量が落ち、特に借地料用のコシヒカリが不足した。やむなく、よそから買って納めることとなったが、折からの米価暴騰で、有色素米での収益を浸食した。この苦い経験から、「やっぱり白いコメが原点だと反省し、２００４年は有色素米の作付けを減らした」。

とは言え、乞われて作る手応えは強く感じており、「有色素米は現在は10ａ当たり6俵と一般の品種より収量が低いが、今後は反収増でニーズに応えたい」と考えている。

小学校の水田実習にも協力
低環境負荷・高反収を狙う

そんな草野に期待の眼差しを向けるのは、ビジネスパーソンだけではない。町内の浅井中部小学校の教師と子供たちも、草野の稲作を必要としている。

同小学校では5年生の総合学習の時間に草野農場での実習というカリキュラムを組んでいる。草野は10ａの圃場をこの授業のために提供し、子供たちに手植え、コメヌカペレットの撒布、手取り除草といった作業を体験させている。

町内には最近住宅地が開発され、実際の水田に触れたことのない生徒が急増した。また、水田を持つ家の子も、実際の水田作業を知らないケースが多い。彼らに、農業生産の現場を感じ取ってもらうのが、この授業の狙いだ。

「子供たちが体験する作業は稲作の中のほんの一部ですが、その体験を中心に、教室では食糧生産、環境問題、水生生物の生態、またコメの栄養についてなど、多面的な授業を展開しています」（同小学校の横山聡子教諭）。

収穫したコメはＮＧＯを通じて、国際援助米としてアフリカのマリ共和国へ送っている。



◀16～17年前に購入した2台目のトラクタ、クボタL1-45。「エンジンが直噴で、振動があるし音も大きいけれどパワーがある。始動性もいい」と気に入っている。





▲上は不耕起栽培に対応した三菱の6条植え田植機。不耕起栽培断念後は通常の移植用アタッチメントを付けて使用している。下のローダーは、除雪専用に使っている。

2000年から始めた授業だが、子供たちは楽しんでおり、学校も意義が大きいと考えている。横山教諭は、「子供たちは本当に楽しみにしています。この先も是非草野さんにお願いして、できるだけ長く続けたい」と乗り気だ。

草野も、「学校以外でも子供たちに会うと声をかけてくれ、自然に水田の話になる」と楽しんでいる。その脳裏には、「自分が子供の頃、水田や小川にメダカ、タナゴ、シジミがたくさんいて、アユが用水にまで上がって来ていた」様子が去来している。あの世界を子供たちに取り戻したい、というのが草野の考えだ。

それが高じて、時に「農薬使わんで、収量が少なくてもしゃあない」と、あきらめとも甘えともつかぬ気持ちが起きたこともあった。実際、ここ数年は収量が落ちている。しかし、今はそれは違うと思っている。「コシヒカリを10俵取る人もいるのだから、できないことはないはず。現状に甘んじていないで、有機無農薬でもコンスタントに8俵取れる経営が今の目標」だ。

落ち込んでいた時期から、今そうして勇気を奮い立たせているのには理由がある。2004年、にわかに一般消費者の顧客が増えたのだ。

消費者への直売は、子供の独立など顧客のライフステージの変化で、年々漸減する傾向があった。ところが今年、「ある教育関係の機関誌に自分の農業のレポートを寄稿したところ、その読者から連日のように注文が入って来た」。新規で80人以上の顧客が増え、暮れになっても発送作業に追われることとなったのだ。

「理解してくれる人がいてくれる。それがわかった」――コメが売れるそのこと自体にも増して、自分を必要としてくれる人々との出会いに、強く勇気づけられた年だった。

肉牛肥育を120頭まで拡大 顧客に直に接する重要さ知る

実家はもともと自作地10aの兼業農家。草野にしてみれば「トラクタの扱い方も誰にも教われなかった」と言うように、ほとんど新規就農で専業農家になったようなものだ。

スタートは稲作ではない。

工業高校の機械科を卒業した草野が、最初に農業への興味を示したのは、肉牛の肥育だった。「当時、ホルスの雄の仔牛を買って450kgまで肥育して売るというのがはやり出していた。中学の同級生が『俺はやる。お前もやれ』と誘ってくれて、自分でも面白そうだと思った」。

実際に肥育の事業を始めたのは、地元企業に就職して2年目のことだ

顧客に必要とされ環境も守る道探す



◀収穫物を収納する倉庫の横に格納されたフォークリフト。「壊れればいつでも直して使えると思うので、どの機械も扱いが乱暴だったかも知れない。しかし今は前よりも大切にしている」。





▲スガノの2連リバーシブルプラウ。礫層から大きな石がゴロゴロと出てきたため、3年ぐらいしか使わなかった。今年はプラスチック板を自分で張り替え、久々に現役復帰させる予定だ。



▶クレーン付きの4tトラック。以前は他の農家の苗箱運搬を請け負っていて活躍したが、今はやめたため、最近はほとんど使っていない。

った。公的資金250万円を借りて畜舎を建て、2頭のホルスを買った。4頭まではまだ会社に勤めていたが、その後畜産に専念した。

当時はまわりの農家が12～15馬力のトラクタを買い始めていた頃だったが、草野は24馬力のトラクタを乗り回していた。いわば近代的な農業の最先端にいた。

顧客と直に向き合うことの面白さと大切さを知ったのもこの頃だった。「ある時期から、農協へではなく、自分で家畜市場へ牛を出すようになった。市場では競りを前に、集まっている博労や肉屋さんに自分の牛を見てもらって批評もしてもらえた。また、そこで知り合った肉屋さんのところへ行くと、肉の塊を出して来て、『この間のお前のとこの肉はこれだ』と見せられた。そうして、その肉の何がどう良くないかといったことを教わった」。

農協出荷では得られない知識を得ると同時に、仕事の面白さを感じた。「作ったものは、自分で売らなあかんと思った。それなのに、農家で家畜市場に来る人なんか、まずいない。農協出荷、共選、そういうものでは伝票しか回って来ないのに」。

入った金は再投資していった。年々規模は拡大し、最終的には120頭まで増やしたと言う。

だが、そんな黄金時代とも言えるような日々を語る草野の目は、急に寂しそうになる。「でも結局、あの頃はあこがれだけだったと思う」と言うのだ。「その後、オイルショックの頃に輸入牛肉が増え始めて、途中からうまく行かなくなった。それで81年に撤退した」。

最後の頃は農協の預託牛の肥育をしていたが、資金が尽き、ある日、農協が牛も餌も引き上げて行った。

屈辱だった。しかも、「お前もやれ」と誘ってくれた友人も経営が破綻し、その後間もなく事故死した。そのことが当時の記憶をさらに暗くしているようだ。

残ったのは、成功体験と友人との二つを失った喪失感と、もう一つ、農薬への疑問だった。「あの頃、牛舎に殺虫剤を撒くと、そのたびに一日中気分が悪かった。ある時、それが薬によるものだと気付き、こういうものを使っていいのだろうかと思い始めていた」。

人の暮らしに資するべきか自然破壊を回避するべきか

畜産から撤退した草野は、全く違う分野へ向かった。「狩猟をやっていたので銃砲店と付き合いがあった。その勧めで、発破のための資格・免許を取得した」。鉱山や採石場やさまざまな工事現場へ赴いて、火薬で山や岩石を爆砕する仕事を始めたのだ。最初は人に付いて仕事をしていたが、後に独立し、㈲草野爆砕という会社も設立した。

爆砕の仕事では、全国のいろいろな場所へ行った。しかも、この作業は朝、他の作業の前にすることが多いため、一仕事終えると翌日まで自由時間がたっぷりできた。それで「行った先ではその土地ごとの圃場を見学したり、山の中もよく歩いた。また、本をたくさん読んだ」。



▶機械除草のアタッチメントを付けて使用するために見付けてきた、中古の乗用田植機。



▲機械の改造や道具の自作に使うため、普段からいろいろなものを集めている。ゴミではなく「宝物」だ。



◀生コンミキサーに長い足を付けるなどの改造を施して作った培土用ミキサー。最近は使用していない。



▲溶接機は、専門家が使う仕様のもの。

この間も、草野の頭には常に、「早く農業に戻りたい」という考えがあった。だから自由時間も、自ずと農業や自然の観察に充て、農業関係の本も読みあさったのだ。

また、日々発破を仕掛けながら、人間が自然と対峙しながら生きていくことの、いかんともしがたさといったものも、全身で感じ取っていた。

「たとえば、セラミックスの原料になる長石の採掘場で発破を仕掛ける。長石が採れるおかげで、われわれはタイルや茶碗などを手に入れることができるんですが、でも一方、そのために山は壊れるのです。どうしたものか。そういうジレンマを感じていました」

その後、油圧を使った割岩機の性能が良くなり、爆砕の仕事は減っていった。草野が最後に発破のボタンを押したのは90年代の中頃だ。

「牛をやって、発破をやって、その時代その時代に必要な仕事をしながら、うまく流れてきた」そう考える草野にとって、今、農業で自分を求める顧客に恵まれていることには、やはり特別な思いがこもる。

規模拡大よりも反収増狙い 環境は守る農業技術を模索

何年から農業に復帰したという明確な線はない。爆砕の仕事をしながら、地元では水田を続けていた。しかも、「高齢化などで年々田んぼをやめる人が増えて、それを請け負っていった。だから、爆砕をやめた頃には水田の面積は5haまで増えていた」。

その後も増えて現在は約9haだが、「これからは反収を上げる方向でいきたい。それでニーズに応えられない部分は、仲間作りで対応したい」と考える。大面積の経営よりも、しっかりとした技術を確立することの方に興味が集中している。

そんな現在の草野の農業は、いわば、かつて長石の山を爆破したときに感じたジレンマを統合する作業のようにも見える。顧客の求めに応えて収益を上げつつ、環境への負荷は低減し、むしろ改善したい——その方法を見付けるため、これまでに不耕起栽培や冬季湛水をはじめ、さまざまな資材や方法を試してきた。

まだ決定打は見つかっていない。

「1年に1回しか試せないのがはがゆい」と苦笑しながら、焦りを抑え、次の作の戦略を日々着々と練っている。

（敬称略）



草野　武

草野農場

【プロフィール】

1948年10月生まれ。工業高校機械科卒業後、農機店等に勤務。その後肉牛肥育に挑戦。撤退後は爆砕の仕事に従事。現在は水田主体の専業農家で、水田約9haを経営。他に大豆作にも取り組み、地域の主婦に自家製みその材料として供給。学校給食に地元産のコメ使用を働きかけた経験もあるなど地域活動にも取り組む。